あとがき

昨年のＮＨＫスペシャルの「病の起源」というシリーズでうつ病がとりあげられていた。それによると、現在では脳内に直接、電極を埋めこむことで治療する試みもおこなわれているという。うつ病を発症する原因は、激しいストレスなどから、脳のなかでも最も原初的な、防衛本能をつかさどる扁桃体が刺戟されるからで、扁桃体が活性化すると恐怖、不安、悲しみの感情が強くなるのだという。したがって、その扁桃体の動きを物理的に抑制すればうつ病も完治するというわけである。そうか、ヒトの感情も一種の物理現象なのかと妙に納得させられてしまった。

いまから三〇年ほど前、私もうつ病的な症状に襲われた経験がある。地方の短大で教鞭をとりはじめて間もない時期で、九〇分の授業をするのがとてもしんどく、ノートをしっかり作っていっても途中で講義するのがいやになってしまった。胃の具合も悪くなり、病院で診察してもらったところ、神経性胃炎とのことで胃薬と精神安定剤を処方された。すると一週間もしないうちに、それまでのうつ状態がウソのように拭い去られて、非常にハイな状態になり、今度はノートなしでも九〇分の授業をしゃべり通しにしゃべりまくるようになった。ストレスの原因は自分でも分かっていたけれど、自分の意志ではどうすることもできなかった。それが毎日ごくわずかな化学物質を体内の取りこむというだけで、自分の気持ちがこんなにも激変するものかと驚かされた。

その時、当然、自己とは何かと考えさせられた。近代文学において尊ばれる個の確立、主体性の確保といっても、たかが微量の化学物質ひとつで大きく動かされてしまう個の主体性にどれほどの意味があるのかと考えさせられてしまった。「電車の混雑について」などで寺田寅彦は人間も大勢が集まると、物理的現象と同じ法則によって動くと指摘したけれど、人間の感情、内面といったものも、ひょっとすると物質世界の法則と同じような原理や法則によって動かされているので

はないだろうか。二〇世紀の後半になってコンピュータが登場し、フラクタル、カオス、セルオートマトンなど次々に確立していった新しい科学的な法則をちょっとのぞいてみただけでも、そんな印象を強くいだかされる。

先日、まだ三〇歳の若さの小保方晴子さんが新しい万能細胞であるSTAP細胞を作り出したというニュースが世界中を騒がせた。これがどれほどのすごい意味をもつことか、私ども素人にはよく理解し得ないが、最初に論文を『Nature』誌に投稿したおり、「何百年にもわたる細胞生物学の歴史を愚弄している」とコメントされたというエピソードからして、これまでの常識を覆すとんでもない発見だったろうことは推測できる。温度三七度の弱酸性（pH５・７）の液体に二五分間浸したあと、遠心分離器にかけて上澄みを取りのぞき、三日間培養するとSTAP細胞が完成するという。一昨年にノーベル賞を受賞してフィーバーした山中伸弥教授のiPS細胞が遺伝子を操作する何やら複雑なものであるのに対して、これはまたいたってシンプルである。

近藤滋の『波紋と螺旋とフィボナッチ』という本を読んでいたら、イギリスの物理学者のディラックの「数学的な美を持つ法則は、実験事実に合致する見苦しい理論よりも、より確からしい」という言葉が紹介されていた。うーむ、そうか。近藤氏は、これは物理学者にとってはかなり普遍的な美意識で、生物学に適用してもよいのではないかといっている。文系人間である私には、「数学的な美を持つ法則」というのがいまひとつ実感できないけれど、これを自然の摂理に逆らわないシンプルさという風に受けとめるならば、まさに今度の小保方さんの作り出した新しい万能細胞はそうした美しさをもつといえよう。そして、また文学研究の世界にも同じことがいえるのではないかと思われる。

二〇世紀も後半になってさまざまな複雑系の科学は、自然がシンプルな法則からいかに複雑な現象を生みだすかということを教えてくれた。人間が作りあげた非常に複雑な社会構造や人間関係、私たちの心のふるまいなどを研究する人文科学においてもある程度は同じ法則を適用させることができるのではないかと思う。人文科学も自然科学とまったく無縁ではないとはいえ、至極あたり前のことだけれど、人文科学が自然科学に影響をおよぼすことはほとんど皆無である。が、

小保方さんの研究成果がやがて私たちの生命観に大きな影響を及ぼすことが疑いないように、人文科学は自然科学からいつも大きな影響をこうむりつづけている。

人文科学においてはつねに人間の意志という見苦しいものが介在せざるを得ない。ことに文学の世界に描きだされる人間の意志ほどやっかいなものはなく、文学研究は人間の意志に左右される経験事実に合致する見苦しい理論によって成り立っているといってもいいのかも知れない。が、その人間の意志も個々のケースにおいては決定的に大きな意味を有するけれど、マスとしてその集合体の動きを観察するとき、どんなに複雑怪奇なふるまいも自然現象と同じようにいたってシンプルな法則にしたがっているとはいえまいか。いま私は文学の世界を、複雑きわまりない自然現象を生みだすところのきわめてシンプルな自然科学の法則と、私たちの意志と行動を律するところのモラルとが交錯する関数としてとらえることを夢みている。

今年度もこの一年間の研鑽の成果として『近代文学　研究と資料』第二次第八集をお届けする。多くの方々からご叱正、ご批評、ご教示をいただけたならば幸甚である。

（千葉　俊二）